



カートリッジ。手前がDECCA Mark-1 Stereo, Mark-1 SP, Mark-2 Stereo, Mark-1 MONO



ターンテーブル部。エアサスペンションの上蓋を開けるとコラール社製ターンテーブル、その横にDECCA純正アームが装備されている



アンプのコントロールパネル。パワーアンプはEL34を2本使った15W クラス2台、パワーサプライ1台がバックスペースに搭載されている



チューナーパネル

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号は1950年代後半に発売されたSTEREO DECOLAをご紹介します。

■ 27 頁 DECCA社

英国デッカ社は1929年にエドワード・ルイスによってイギリス、ロンドンに設立された。蓄音器メーカーを母体として設立された英国DECCAレコードが良く知られているが、もともとDECCAはハードウェアの会社で高い録音技術を持っており、FFRR(full frequency range recordings)、FFSS(full frequency stereophonic sound)等は当時のDECCA社のトレードマークだった。その録音技術の高さからウィーンフィルハーモニー管弦楽団の録音の完全契約をしていた時代もあった。1950年代前後からはレコードプレーヤー、カートリッジ、アンプ、スピーカー、チューナーを搭載したコンソール型のシステムであるDECOLAなども手がけるようになる。

本文 / 田中伊佐資
製品解説 / 岡田幸司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)
取材協力 / サウンドクリエイト



DECCA STEREO DECOLA

英国デッカ社内にデコラ開発部門が立ち上げられ、最初のシステムはモノラル仕様。内蔵されたスピーカーにはTANNOYやGoodmansのユニットが搭載されていた。その後EMIのスピーカーを搭載したSTEREO DECOLAの生産が1959年頃から始まり100台ほど作られ、英DECCA製ステレオレコードのブランドイメージの向上に貢献。さらに英国EMIとのステレオLP販売合戦でイニシアチブを取るきっかけにもなった。日本では五味康祐氏の「オーディオ造札」に登場することで良く知られるようになる。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

DECCA



正面の扉を開けた状態。上段にはシングル盤、下段にはLPレコードが丁度収まる

スピーカーはEMI製のツイーターが左右にそれぞれ6個を搭載。エンゾールでのステレオ再生に最も効果的な特殊な角度で装着されている。さらにEMI製の楕円フルレンジユニット92390が密閉のキャビネットに入り、1本ずつ左右のコンソールにスポンジで浮かせて搭載されている



DECOLAのエンブレムは上蓋を開けた奥に付いている



コンソール左右のスピーカーのサラネットのカラーは初期モデルがグリーン、後期モデルはベージュが採用されている



手頃でいい感じの大きさが魅力
物欲が掻き立てられるスピーカー

このところ物欲の虫がさむざむと騒ぎ出してきて、どうもいけない。ほくはオーディオについては1セット集中主義で、サブシステムとか寝室システムとかを持たないタイプなのだが、長いことこの連載を続けてきたこともあり、ワインテージで一貫した機器が欲しくなってきた。プランは何もないのだが、ともかく置く場所がないから、スピーカーもアンプも一切合切が小型であることが望ましい。

そこへ来て、今回はEMIのモニタースピーカー、しかも手頃でいい感じの大きさ(価格も割程圈内だ。のっけから興味津々だった)。

今回は2種あり、まず出てきた319というモデルは、楕円ツイーターとそのフロントにトゥイーターを付けた同軸ユニットを採用している。因は違えど、楕円はドイツのイソフォンやRFTで聞いた記憶があり、イメージはなかなかいい。

岡田さんは、さて今日はなにをかけるかかねといろいろな曲をちょこちょこ試し聴きしている。もうその段階でだいたいの様子がわかってきた。

ビル・エヴァンスの定番「ワルツ・フォー・デビー」でスタート。しとやかに英国スピーカーに共通の味わい深い洗みがある。これは貴族の音、原音忠実再生ではないが、心の隙間にすっとさりげなく入ってくる。何度も聴いてよく知っている「デビー」だが、またひとつ新しい

風合いを感じた。

EMIとなればクラシック。ではなくてはくはビートルズ。勝負どころとしているジョン・レノンの声を聴かないと始まらない。曲は「ノルウェーの森」。声にうるおい感があつて色っぽい。ビートルズ・オーディオを極めようとしたらちよつと驕りがある英国製スピーカーになるんだろかななんて思った。

ジュリー・ロンドンのハスキー・ヴォイスもまた愛いがある。同軸でもしもトゥイーターがツイーターと同じ紙素材なので、すこすこまじまりがいい。

ここで少し大きな529が登場。これは同軸ではなくダブルのトゥイーターにツイーターという構成。比べる意味もあつてそのままジュリーをかけてもらおうと、中高域の分解能がよくなり、すつきりと整理して聴かせる。319が持っていた演出が減退してハイファイ調になった。スタジオで使うモニターとしてグレードはアップした。しかしワインテージ・オーディオの価値判断は単純ではなく、319の付帯音があるような、含みがあるような音にもそこが惹かれる。

最後はスコットランド室内管弦楽団のモーツァルトで比べてみる。弦の響きは間違いない529が抜群にいい。この大きさでこんなに裕福な音がするもんなかと思つた。岡田さんというように、ロックやジャズが好きなくが言うのだから間違いないと思えます。